

「これは、りつりん、と読むんよ」

貫太の質問に、女性がきつぱりと答えたとき、木梨凜子はやつと高松にたどり着いたという実感がわいた。

列車の中から瀬戸内海を眺めても、うどんと書かれた店の暖簾をくぐっても、凜子はいつこうに香川に足を踏み入れた気がしなかった。

しかし、少し鼻にかかった、温かい女性の訛りを聞いたとたん、凜子の胸に懐かしさがこみ上げた。数年前にこの土地で過ごした日々の思い出が、さつと瞼の裏を通り過ぎていく。目を閉じて、生温かい風に身をまかせながら、凜子は貫太に聞こえぬよう、そつと呟いてみる。

「ただいま」

五月のゴールデンウィーク初日。

駅前には、キャリーバッグや土産袋を手にした家族連れやカップルでにぎわっていた。その混雑ぶりに、普段はおとなしい街が、心底驚いているように見えた。

これは「りつりん」と読むのよ、と凜子が教えようとした少し先に、貫太は小さな地図を広げ、

駅前を歩くひとりの女性に勢いよく声をかけた。

「すみません。くりりん公園はどちらですか？」  
凜子は思わず笑い出しそうになった。が、自分だつて最初は「くりばやし公園」と読んでいたことを思い出し、緩みかけた口もとをふいに引き締めた。

あ的时候は、佑介に教えられたのだった。

「これは、りつりん、って読むんや。まあ読めんやろうなあ、東京の人やったら」

そして、人に決して恥をかかせない気遣いのできる彼は、こう続けた。

「俺だつて、東京の地名を何回まちがえたかわからん」と。

そんな佑介が凜子は好きだった。博識で頼りがいのあるところも、早口で機敏なところも、腕の筋肉の盛り上がり具合や、左小指にある小さなホクロでさえも。

けれど人の気持ちは移ろいゆくものだ。栗林公園の桜が散った後には新緑が見られ、池で泳ぐ鯉でさえ暑さにもだえる夏が終わると、葉はやがて黄や赤に染まっていくなう。

佑介との別れを決意させた土地に、再び別の男と結婚前に訪れるというのは、皮肉なことだろうか。

五年前、佑介に連れられて凜子がはじめて香川に来たとき、きつと自分はこの場所で生涯を終えるのだろうか。

だが佑介の実家を訪れ、秋祭り前後の数日間をそこで過ごし、帰京するためはこの駅に再び戻ってくる頃には、凜子の心はすでに傾きかけていた。ここでは暮らせない。ここでの生活がわたしの望む人生ではない。

そんな思いが、土産袋を両手に抱えた凜子の胸に、押し寄せていた。

結局、セルフと貯金が好きで、競争を好まない県民性を持つ人たちとの触れ合いに、凜子は背を向けた。温暖な気候に恵まれながらも、夏になるとダムの貯水率がトップニュースになるこの街での暮らしに、顔を背けた。

気がつけば、あんなに愛しいと思っていた人の手を振り払い、さよならという言葉を口にし、彼は逆方向に歩きはじめていた。

五年前の秋、この街のいたるところに掛けられた垂れ幕は、街おこしのためのものでもなければ、交通安全の標語でもなかった。どこに目をやっても、節水、喝水、の文字がいろんな字体で街を飾っていた。

香川に滞在中、セルフのうどん屋さんで、水のおかわりをしようとして、凜子がウォータークーラーに近づいたときだった。

「遠慮しとき。ひとり一杯や。いまは水不足やけんな」

と、冗談とも本気ともつかない表情で告げた佑介の横顔や、自分の欲しいうどんを、きびきびと注文するお客たちの姿が、まるで昨日のことのように鮮明に思い出される。

あれから五年。凜子はいま、再び高松に降り立った。婚約者、合田貫太とともに。

あはは、と貫太は空を仰いで笑っている。

「凜ちゃん、これは、りつりん、と読むんだとさ」

凜子は、小さな子どもを見るような優しい眼差しを、貫太に向けた。そして、ふと思った。さ

て、いつ言おう。どのように切り出そうか。

東京からここへくる間、何度も機会はあったはずなのに、凜子はなんでもない一言を貫太に告げることができずにいた。

ふたりは電車に揺られ、公園と同じ名前の駅で降り、目的の公園へと歩を進めた。

ひとたび言ってしまうえば、貫太に反対されることも、しつこく理由を聞かれることもないだろう。けれど、ひとかけらの罪悪感と後ろめたさが凜子の口を閉ざし、公園内を歩く足どりを重くさせていた。

「友だちがいるの。おんな友だち」

こういうときは、唐突に言うに限る。

この公園の鯉は巨大だ、と少年のようにはしやぐ貫太の声をさえぎるように、凜子は突如、切り出した。

友だちが香川に住んでいる。だからこの機会に久しぶりに会いに行きたい、と。

言ってしまったえば、なんとということもなかった。

しかしなぜわざわざ、友だちと言ったあとに、<sup>5</sup>お

んな友だち、とつけ加えたのだろうか、凜子は自分を呪いたくなくなった。

貫太はそんな凜子の失言にも気づかず「行っておいでよ。ぼくはこの辺を散歩してるから」と悠長に答え、これからすぐにも、凜子が友だちに会いに行くのだと、勘違いしたようだ。

凜子は心の大きな荷物をおろし、すがすがしい気分になっていた。青々と茂った葉や巨大な鯉の群れが、やっと視界に入ってきた。

同時に、うつとりとした目で鯉を追う、となりの男を見て思う。ほんとうになにも疑われない、なにも気にしない男だな、と。

四日間の旅。凜子は三日目に、友人に会いに行くという理由で、貫太と別行動することを決めた。

「どうして、今回の旅の行き先を香川にしたんだっけ？」

旅行初日の夜、ホテルに帰ると貫太は、どうでもいような口調で話しかけてきた。

「ふたりで決めたじゃない」

凜子はそれだけ言うと、話題を変えるためにテ

テレビ画面を指さして、「あつ、けんかしてる」と声をあげた。

「乱闘か」

テレビではプロ野球中継をやっていた。

凜子は話題の変更に成功したようだ。貫太は画面に釘づけになり「これはわざとじゃない。でも頭を狙って投げたようにも見えるよな」と、どちらのチームの味方でもないような発言をした。

そもそも、ゴールデンウイークに国内旅行をしようと言いだしたのは、貫太だった。

お互いに東京で仕事を持ち、結婚してもハネムーンはおろか、しばらくは日帰り旅行にさえ出かけられないだろうと思っただふたりは、五月の連休に同時に休みがとれることがわかると、すぐに旅の計画を練った。

行き先がなかなか決まらず、ふたりが頭を抱えていたときだった。テレビでは、あるバラエティ番組が放映されていた。ダーツを日本地図に向かって投げ、それが立ったところを訪れよう、という企画である。

「よし、これで決めよう」

ふたりの声が重なった。こんなとき、妙に貫太とはよく気が合った。

さっそく凧子は、貫太の部屋の片隅にあった日本地図を広げ、ドイツの代わりに使うことになった鉛筆は、貫太が投げた。

鉛筆は地図に小さな点を一瞬にして記し、床にぽとりと転がった。先の丸くなった芯が刺さったのは、どうやら広島のようなだった。

凧子はいまでもわからない。なぜ、貫太が鉛筆を投げて地図を持つ凧子のそばにやってくる数秒間に、鉛筆を素早く拾い上げ「ここよ」といって、広島ではなく、香川をそっと指さしたのかが。

ただ、「さあ、鉛筆はどこに刺さったかな」

と、はしやぎながらこちらに向かってくる貫太の足音が、生涯の伴侶は、彼でほんとうにいいのかと聞いているようだった。もう一度最後に“彼”に会っておかなくてもいいのか、と何者かが凧子の耳元で囁いたような気がした。

「あれ？中国地方に刺さったように見えたけど、四国だったか」

貫太は無精ひげを触りながら首をかしげた。



のときも彼は、なにひとつ疑わなかった。  
(以上5月30日放送分)